ドイツ

牛足ワンピース・シュティーフェル

ベアトル・クレチャさん

ドイツ・バイエルン州の州都、ミュンヘンに「シュー・ベアトル」という靴屋がある。店主のベアトル・クレチャさん自ら企画・プロデュース&手づくりした靴の店だ。

ずっと以前の本誌（２００３年春号）で紹介したことがあるので、ご記憶の読者もいるかもしれないが、ベアトルさんが最近、夢中になっているのが、ワンピースの靴だ。

靴で言うワンピースとは一枚の型紙で出来ている、アッパーに縫い目のない靴のことだが、ベアトルさんのワンピースは、ちょっと違う。縫い目がないのは同じだが、型紙は使用していない。牛の脚部分の皮を筒状に剥がし、それをそのまま鞣し、筒状であることを生かし、靴にしたものだ。いわば牛の足を被っていた皮を、人間の足に履く靴（正確には半長靴）に成型し直したが故の「ワンピース」なのである。

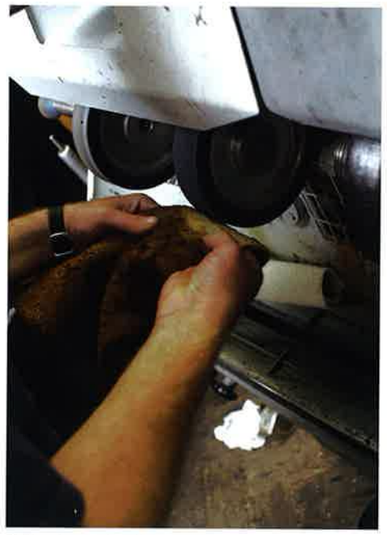
ベアトルさん曰く「靴づくりの修業をしていた頃、牛の前足から採った革で靴を作る技があるのを知り、非常に興味を持った。それ以来、思い付く度に実験を重ね、前足の革でシュティーフェル（ブーツ）を作ることに成功した。聞いたのは短靴だったから、ブーツは自分のオリジナルと思っていたが、後にフランスの太陽王（ルイ14世）がお抱えの靴屋に牛の足の革でブーツを作らせたという文献を見付けた。俺と同じことを考えた先人がいた訳だが、俺が歴史に埋もれていた靴づくりを復活させたという訳さ」。

ベアトルさんは元々は牧畜を生業としていたが、たまたま見た靴づくりに魅せられ、マイスターの下で修業し、靴職人になった。その経歴も異色なら、靴職人としても異色。バイエルン地方伝統の革のハーフパンツを日常着とし、作る靴の代表モデルはバイエルンの野山を歩くのに最適なブーツ。かつて生活を共にし、革をもたらしてくれる牛を含む自然との共生、そして先人の生活に学ぶことが信条だ。太陽王云々が史実であるかどうか定かではないが、ワンピース・シュティーフェルは、実にベアトルさんらしいワンピースなのである。

写真は、小学生たちがワンピース・シュティーフェルづくり見学したの時のもの。近々にベアトルさんが選んだ腕利きの職人5人が製作した、１００足のワンピース・シュティーフェル展を予定している。

完成したワンピース・シュティーフェル

帽子のように被れる。革そのものが筒状ワンピースなのである。


裏側にグラインダーを掛け、余計な部分を取り除き、厚みを均等に。

ベアトル・クレチャさん

材料となる革。牛の脚が想像できる。

靴型に被せて、いよいよ釣り込み。

履き口になる方の側を適当な長さに切ったら、ブーツ伸張器を入れ、ちゃんとした筒型に成型。

裏、すなわち肉面が表になっているのでひっくり返す。

周縁の余計な部分を切り取り、釣り込み。革が厚いのでかなり力がいるようだ。

釣り込み終了。

「靴の形になっただろう」。小学生たちは触って体験。